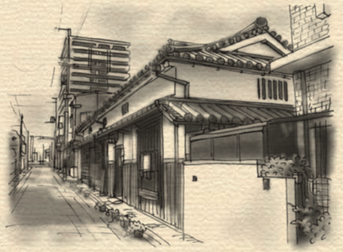
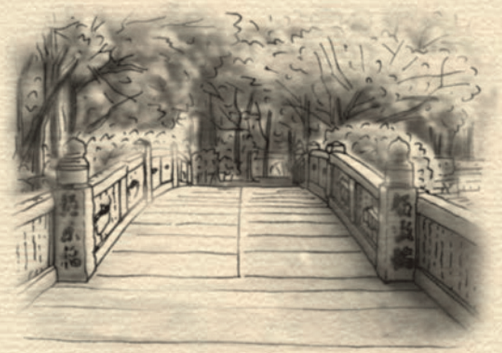
まち歩き阪堺線シリーズ

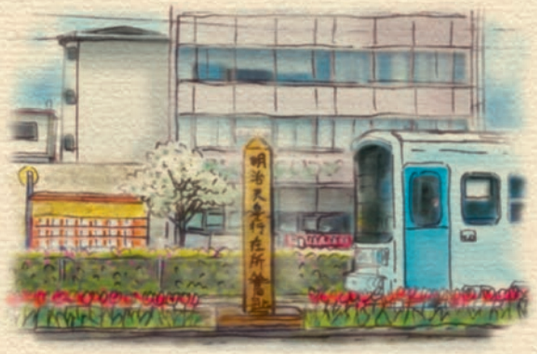


JXTGエネルギー株式会社 堺製油所

JXTGエネルギー株式会社 堺製油所

まち歩き阪堺線シリーズ





JXTGエネルギー株式会社 堺製油所

JXTGエネルギー株式会社 堺製油所

まち歩き阪堺線シリーズ

JXTGエネルギー株式会社 堺製油所

刊行の辞

本書はＪＸＴＧエネルギー㈱堺製油所が一九七四年に創刊いたしました月刊地域紙『フェニックス』の45周年を記念して、二〇一二年より随時連載いたしました「まち歩き阪堺線シリーズ」をまとめ、刊行するものです。

月刊地域紙フェニックスは、堺製油所と近隣住民の皆様との交流を深めることを第一の目的とし、創刊されました。当初は製油所の環境安全対策報告を中心とした紙面でしたが、読者である近隣の皆様からのお声を反映し、一企業の地域紙という枠にとらわれず、読者の皆様にとって役立つ・楽しめる様々な情報を提供するようになりました。時代と共に変化し続けるフェニックスですが、近隣住民の皆様と共にありたいという想いは創刊当初から今でも変わっておりません。45年という長期にわたりフェニックスを発行できたのも、私たちの想いに応えて下さる読者の皆様のお力添えの結果です。

さて、今回刊行いたしました本書は、フェニックスの人気特集である〝まち歩き阪堺線シリーズ〟を、持ち運んでいただけるハンドサイズの冊子にまとめたものです。

阪堺線の各停留場にスポットを当て、面白い名所や旧跡を紹介する本書は、初めてその地を訪れる方はもちろん、地元の方にも楽しんでいただける内容になっております。

本書を通して郷土愛を深めていただくきっかけになれば幸甚に存じます。

本書が、フェニックスのように読者の皆様に末永く愛される一冊になることを願っております。

月刊地域紙「フェニックス」
1974 年創刊。地域関連情報や当製油所からのお知らせを掲載し毎月発行しており、地域の読者に支えられ、2019 年 3 月号で通算 544 号を達成しています。

堺製油所は、西日本の大消費地である大阪府に展開する堺・泉北臨海工業地帯に位置しています。ガソリンや灯油、軽油、重油といった石油製品の生産に加えて、石油化学製品の生産も行う一体型製油所で、省エネルギー効率は日本のトップクラスにあります。

刊行の辞……2

1 〈大和川～高須神社〉
江戸時代の記憶を残す街並みをゆく 2012・11
風間寺／北之橋跡／千日井・供養碑／高須神社……6

2 〈高須神社～綾ノ町〉
晶子の先輩詩人の生家跡や慧海が学んだ寺子屋 2013・3
河井醉茗生家の跡碑／清学院／樽善の石灯篭／鳳翔館……8

3 〈綾ノ町～神明町〉
熊野権現の上人伝説から日本最古級の町屋へ 2013・6
北十萬／堺市立町家歴史館山口家住宅／月蔵寺／堺自転車会館……10

4 〈神明町～妙国寺前〉
与謝野晶子の初恋や明治の「堺県」を偲ぶ 2013・11
正中山覚応寺／本願寺堺別院・堺県庁跡碑／勝軍山善長寺／極楽橋……12

5 〈妙国寺前～花田口〉
堺きっての貿易商と子育て幽霊伝説の寺 2014・3
材木町交差点／本受寺／大阪府立泉陽高等学校／櫛笥寺……14

6 〈花田口～大小路〉
「聖女伝説」から「奇縁氷人石」へ 2014・6
戎公園（ザビエル公園）／堺奉行所跡碑／山本梅史生家の跡碑／菅原神社……16

7 〈大小路～宿院〉
「晴明伝説の辻」から「白夜の兎」群像へ 2015・1
晴明辻跡碑／開口神社／宿院頓宮／大浜公園……18

8 〈宿院～寺地町〉
「千利休屋敷跡」から「河盛仁平邸宅跡」へ 2015・6
千利休屋敷跡／阿免寺／堺市立英彰小学校／明治天皇行在所旧跡（河盛仁平邸宅跡）……20

9 〈寺地町～御陵前〉
「晶子の母校」から「乳守明神社」へ 2016・1
堺市立少林寺小学校与謝野晶子歌碑／旭蓮社大阿弥陀経寺／大安寺／南宗寺／乳守明神社……22

10 〈御陵前～東湊〉
「出島浜」から「風車の里」へ 2016・6&8
出島漁港／船待神社／旧湊郵便局／湊西ぼうさい公園／堺市立新湊小学校前風車……24

11 〈東湊～石津北〉
「阪田三吉」「小栗判官」伝説的人物の足跡をたどって 2017・8
触松人権歴史館阪田三吉記念室／王将阪田三吉顕彰碑／一里山地蔵尊／太鼓蔵／熊野街道碑……26

12 〈石津北～石津〉
「乳岡古墳」から「えべっさんの街」へ 2018・4
乳岡古墳／石津神社／石津太神社／横寝地蔵……28

13 〈石津～船尾〉
「太陽橋」から「諏訪森」へ 2018・11
太陽橋／北畠顕家戦死の地碑／諏訪神社遥拝所／浜寺船尾薬師堂／堺聖テモテ教会／諏訪神社／南海諏訪ノ森駅西駅舎……30

14 〈船尾～浜寺駅前〉
「諏訪ノ森駅西駅舎」から「浜寺公園駅旧駅舎」へ 2019・1
南海諏訪ノ森駅西駅舎／浜寺三光会館・紀州街道碑／三光松跡碑／海道畑停留場跡／浜寺公園／南海浜寺公園駅旧駅舎……32

堺製油所のあゆみ……34

編集後記

《凡例》
本冊子は「フェニックス」2012年11月号から2019年1月号にかけて計15回（前後編含む）掲載された「まち歩き阪堺線シリーズ」を再編集したものです。
紙面カラー化（2015年1月号）前のイラスト・写真等は、原紙面同様モノクロとしています。
本文・部写真については、本冊子の紙面スペースに合わせた量の調整、語句の修正等改訂を行っています。
ただし、記されている内容は原記事掲載時点（左上に記載）の情報ですのでご注意ください。

まち歩き阪堺線シリーズ① 大和川～高須神社
江戸時代の記憶を残す街並みをゆく

阪堺線を南にたどる新シリーズ。スタート地点は、堺の北端に位置する阪堺大和川停留場です。高須神社停留場までの道筋には、面白い名所・旧跡が残っています。

高須神社

悲劇の町割奉行ゆかりの地

大和川停留場を降りて西に向かい、紀州街道に入って住宅や工場が軒を並べる通りを南に行くと風間寺（かざまじ）があります。ここは江戸時代初期に堺の町割（街路や敷地の設定）を行った風間六右衛門が自刃した旧跡です。六右衛門は、元和元年（一六一五）の大坂夏の陣で灰燼に帰した堺の再建に携わり、町割を完成させました。ところが熱心な日蓮宗徒であったため他宗から「贔屓をして日蓮宗系の寺院に一等地を与えた」など不平不満の声が上がり、幕府へ直訴されました。「三日以内に江戸に参じよ」（当時は早くて七日間ほどかかったといいます）と無理難題を課せられた六右衛門は、江戸に向かうと見せて並松町で割腹しました。その町割は「元和の町割」と呼ばれ、現在の市街にも色濃く継承されています。

阪神高速北側から紀州街道筋をのぞむ

環濠に掛けられた北之橋跡

風間寺前を南下すると交差点があり、そこが北之橋跡です。中世の堺を護っていた環濠は秀吉によって埋められましたが、六右衛門の町割によって復活し、その紀州街道の出入口として

架けられたのが北之橋です。長さ約一二・七m、幅約四・五mで、大門と高札場がありました。北之橋から南之橋（現在の少林寺橋）までは約二・七km）で、これが江戸時代の堺のまちの全長でした。

かつて北之橋があった交差点。手前は説明板

行基と神南辺道心ゆかりの地

道路を西に向かうと堺七道郵便局の前にある千日井（せんにちい）に出ます。七道界隈は、かつては七堂濱と呼ばれていました。民衆に慕われた奈良時代の名僧・行基（六六八～七四九）が開いた寺の七堂伽藍が名の由来で、千日井はその遺構といわれており、上水道整備がされるまで地元民の優れた飲料水源でした。

柵に囲まれた中にある行基ゆかりの千日井

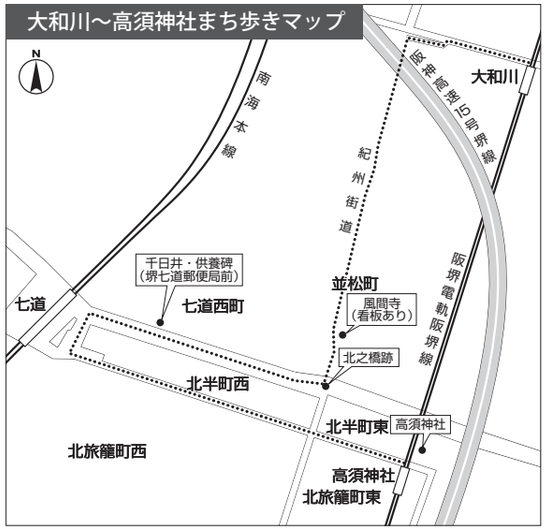
千日井のそばには土居川・千日橋の建立者である岩ノ喜兵衛と水難者の供養碑があります。これは江戸時代困窮者の救済に尽力した神南辺道心（かんなべどうしん）（？～一八四一）の発起により建てられたものです。

神南辺道心ゆかりの供養碑

堺鉄砲鍛冶の鎮守・高須神社

千日井から一筋南に下り、今度は東に向かっていくと、芝辻理右衛門（？～一六三四）ゆかりの高須神社へと到達します。理右衛門は慶長一六年（一六一一）我が国初の大筒を家康に納入しました。また大坂冬の陣でも鉄砲を納入、さらに火縄銃修理を行い、これらの功績によって、元和元年（一六一五）に高須に土地を賜わり神社を建てました。境内北側になると願いが叶うという萬願石があります。

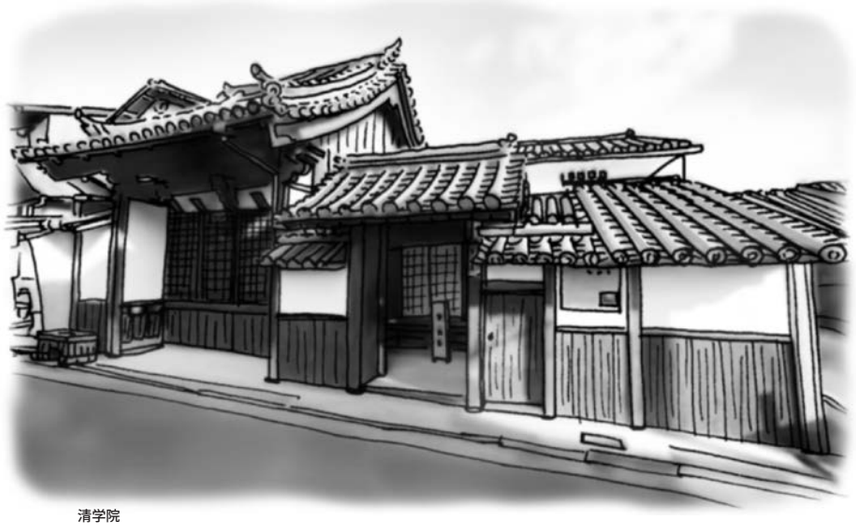
阪堺線の踏切の向こうに高須神社の鳥居が



■参考資料
『堺鉄砲研究』堺鉄砲研究会、『堺春秋4』堺春秋発行所、『摂河泉文化資料第6号』北村文庫会会報編集部、『泉州文化資料6』貝塚和泉郷土史研究会、『紀州街道』向陽書房、『河泉16行基』大阪府立三国丘高等学校史学部、『行基 生涯・事跡と菩薩信仰』堺市博物館、『さかい1993～1994』新日本製鐵株式会社堺製鐵所、『さかい1995～1996』新日本製鐵株式会社堺製鐵所

まち歩き阪堺線シリーズ② 高須神社～綾ノ町
晶子の先輩詩人の生家跡や慧海が学んだ寺子屋

一帯は古くからの街。与謝野晶子の先輩詩人の生誕地や江戸時代の寺子屋の面影を残す寺院、チベットを探索した宗教家・河口慧海の父にまつわる石灯篭などがあります。


清学院

散文詩人・河井醉茗生家の跡碑

高須神社から西に向かい、紀州街道を南に進むと、明治から昭和にかけて活躍した詩人・河井醉茗（かわいすいめい）の生家の跡碑があります。明治七年（一八七四）生まれで本名は又平。一八歳のときに『少年文庫』に詩が掲載されたことがきっかけで「文庫派」の詩人として活躍。与謝野晶子は醉茗らが中心になって結成した浪華青年文学会に所属して活動していた時期もあります。女性詩人の育成や地位向上に努め、昭和四〇年に九〇歳で没しました。

詩人の記憶を伝える街なかの碑

国の登録有形文化財寺子屋だった「清学院」

紀州街道をさらに南下し、いったん西に向かって三つ目の筋を北上すると堺市立町家歴史館「清学院（せいがくいん）」（開館時間一〇時～一六時、火曜日休館、入館料一〇〇円）にたどり着きます。もとは天正元年（一五七三）に開かれたとされる修験道の寺院。江戸後期から明治初期には「清光堂」という寺子屋で、チベットを探検した宗教家・河口慧海（かわぐちえかい）も学んでいました。

小さな敷地に不動堂・庫裏・門がコンパクトに纏められており、江戸時代以来の街に現存する数少ない修験道寺院として平成一四年（二〇〇二）に国の登録有形文化財に登録されました。

往年の寺子屋の雰囲気がしのばれる

清学院の入り口

慧海の父・善吉が奉納の石灯籠

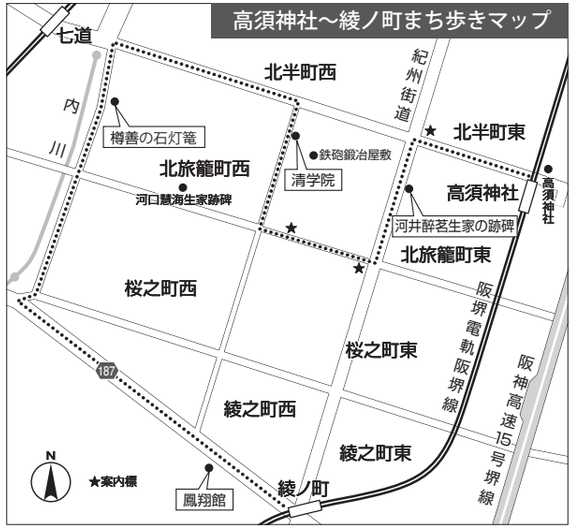
清学院から筋を四本ほど西に向かい、内川緑地沿いの道を南下すると、菅原神社の御旅所（おたびしょ）。中には入れませんが金属ネットの向こうに鳥居と石灯籠を見ることができます。南側石灯籠の台座の真ん中には「樽善」という彫り物が残されており、河口慧海の父・善吉が仲間と一緒に奉納したことを示しています。善吉は樽や桶を作る職人で、平生は仕事一筋の人物でしたが曲がったことが大嫌いで、ある庄屋の悪政を正す訴訟を起こし財産を減らしたといいます。思い立ったら損得抜きで一直線に行動するところは、仏典を求めて命がけでチベットに密入国した息子の慧海にも通じるものがあります。

慧海の父ゆかりの石灯籠

古い町屋を改造した無料休憩所「鳳翔館」

内川沿いをさらに南下して、府道一八七号線を東側に向かっていくと、鳳翔館（ほうしょうかん）にたどり着きます。古い町屋を改造し平成一九年（二〇〇七）にオープンしたコミュニティ・スペースで、一階には堺の大きな古地図を展示、座敷になっている二階では与謝野晶子関連の資料なども紹介しています。土・日曜日のみの開館（一一時～一七時）ですが、無料休憩所として活用できます。

古風な町屋が休憩所に



■参考資料
『関西文壇の形成 明治・大正期の歌誌を中心に』前田書店出版部、『河井醉茗 詩の自立』山梨大学、『島本久恵―河井醉茗とともに その九十年の軌跡をめぐって』泉北読書会、『清学院 堺市立町家歴史館』堺市市長公室文化部文化財課、『河口慧海―日本最初のチベット入国者』春秋社、『河口慧海―仏教の原点を求めた人』堺市博物館、『遥かなるチベット―河口慧海の足跡を追って―』中央公論社、『河口慧海―人と旅と業績―』大明堂、『仏教を歩く28大谷光瑞 河口慧海』（週刊朝日百科二〇〇四年五月二日号）朝日新聞社、『河口慧海日記―ヒマラヤ・チベットの旅』講談社

まち歩き阪堺線シリーズ③ 綾ノ町～神明町
熊野権現の上人伝説から日本最古級の町屋へ

「綾ノ町」は応仁の乱のころ京から大勢の織物師たちが移り住んで綾織をはじめたのが由来といわれています。その綾ノ町界隈の物語を訪ねながら神明町まで歩きます。

山口家住宅

「熊野権現の生まれ変わり」十万上人ゆかりの寺へ

綾ノ町停留場から府道一八七号を南東の方角に進んでいくと、浄土宗西山禅林寺派の寺院「北十萬」（錦之町東二丁）に出ます。室町時代の延徳二年（一四九〇）に衆徳恩冏が開基したと伝えられ、恩冏は阿弥陀経十万巻を書写したことから「十万上人」と呼ばれました。

北十萬

興味深いのは十万上人が「熊野権現の生まれ変わりである」という民間の信仰があったこと。山門前には「熊野権現降臨地」という石碑が建っています。同じ堺区の熊野町も十万上人が由来だという説もあります。

熊野権現降臨地碑

江戸時代初期の町屋建築「山口家住宅」

北十萬の前の道を南下し、最初の交差点を西側に曲がると「堺市立町家歴史館 山口家住宅」（錦之町東一丁）、慶長二〇年（一六一五）の大坂夏の陣で堺の街が全焼した直後に建てられたという主屋があります。現存する江戸初期の町屋は全国でも珍しく、昭和四一年（一九六六）に国の重要文化財に指定されました。土間にある巨大な梁やへっつい、樹齢二百年近いという大ハゼの木を中心とする庭などが見られます（入場料大人二〇〇円・火曜休）。

山口家住宅

恩讐を超えて建立 大野道犬斎慰霊塔

山口家住宅からもう一度、東に進み、北十萬の前の街道に戻って南下すると「青陽山月蔵寺」に出ます。ここには大野道犬斎治胤の慰霊塔があります（堺市文化財公開の時のみ見学可）。大野道犬斎は、大坂夏の陣で、堺の町衆が家康方についたことから、堺を強襲して寺社民家二万戸を焼きました。その結果、夏の陣後に捕縛され、見せしめのために火炙りにされるという無残な最期を遂げました。慰霊塔はその出来事を目のあたりにし、恩讐を超えて菩提を弔おうとした堺の町衆によって建立されたと考えられます。

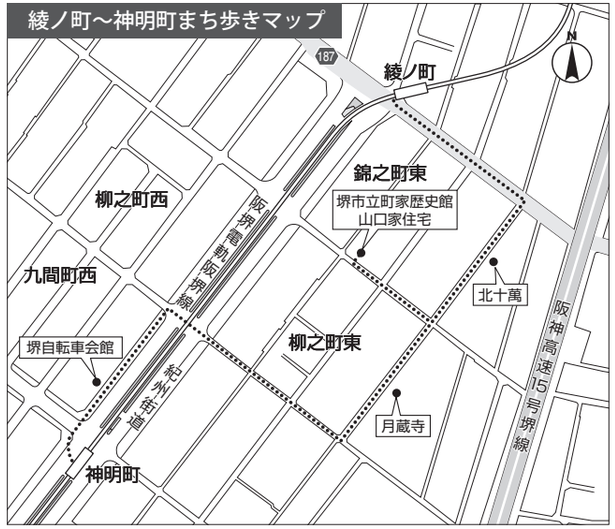
月蔵寺

大野道犬斎慰霊塔
（写真提供：月蔵寺）

ものづくりの歴史に触れる 堺自転車会館

月蔵寺を出て西に向かい、紀州街道を南に進むと、最後に「堺自転車会館」（九間町西一丁）に出ます。ここは自転車の簡易展示施設で、自転車の構造やパーツ品の分解展示などを無料で見学できます（土日祝・年末年始は休館）。自転車は明治時代に輸入品として入ってきましたが、その修理や代替部品の製造に堺職人の技術が大いに活用され、それが日本の自転車産業のはじまりとなりました。古墳、土師器、鋳物師、鉄砲、刀包丁鍛冶、自転車と続いてきた「堺のものづくり一五〇〇年」の現在進行形を感じ取れるポイントとしてオススメです。

堺自転車会館



■参考資料
『和泉名所図会』秋里籬島・竹原信繁、『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告書』大阪府、『堺市立熊野小学校創立百周年記念誌』堺市立熊野小学校、『堺市歴史的建造物調査報告書 堺の寺社建築』堺市生涯学習部社会教育課・堺市教育委員会、『環濠都市・堺と山口家住宅』堺市市長公室文化部文化財課、『堺の民家』大阪府教育委員会、『フォーラム堺学第5集』堺都市政策研究所、『月蔵寺報』月蔵寺、『堺商工会議所報 2007年』堺商工会議所、『堺市の自転車工業』堺自転車産業振興会事務局

まち歩き阪堺線シリーズ④ 神明町～妙国寺前
与謝野晶子の初恋や明治の「堺県」を偲ぶ

かつて神明神社があったのが神明町という町名の起こり。駅前から寺町エリアを通り、土居川公園まで歩きます。

極楽橋

歌人与謝野晶子ゆかりの寺

神明町停留場から南東に向かうと「正中山覚応寺」（拝観自由・無料）の門前に出ます。同寺の住職を務めた歌人・河野鉄南（一八七四～一九四〇）は、与謝野晶子の「初恋の相手」と目されています。出会いは明治三二年（一八九九）のことで、晶子は激しい恋文を送っていますが、鉄南は妹に接する態度で返事をしています。結局晶子の初恋は実らず、鉄南の紹介で夫となる与謝野鉄幹に出会いました。同寺の境内には歌碑もあり、毎年五月二九日の晶子の命日には「白桜忌」が行われています。

正中山覚応寺は拝観自由（無料）

覚応寺境内の晶子歌碑

吸収合併された幻の「堺県」

覚応寺の前から南に進むと「本願寺堺別院」。かつてここには「堺県庁」が置かれました。堺県は慶応四年（一八六八）和泉国および河内国の一部を領域として設置され、後に現在の大阪府東部さらには明治九年（一八七六）奈良県全域を編入して巨大行政区となりましたが、明治一四年に大阪府に吸収合併されてしまいました。合併がなかったら、堺の歴史は大きく違っていたでしょう。

本願寺堺別院の堺県庁跡碑

真田十勇士のモデルが建立した寺

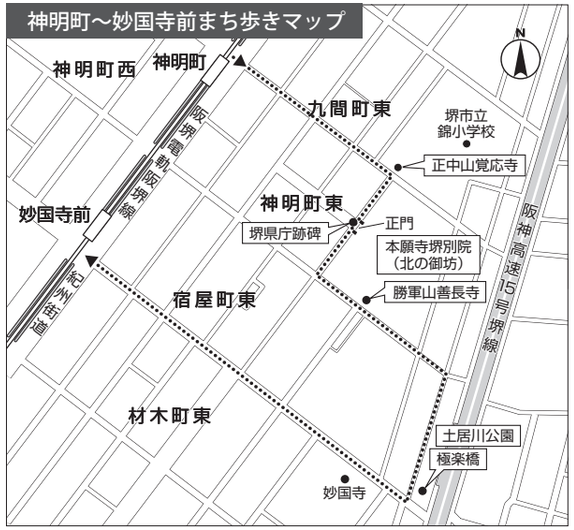
本願寺堺別院の門前を南下し、角を曲がって東に進むと「勝軍山善長寺」があります。善長寺は三好政勝（一五三六～一六三二）が父・政長の菩提所として開基したものです。政勝は室町末期から戦国時代にかけて勢力を誇った三好一族の一人で、織田信長に降伏し、本能寺の変後は秀吉、その死後は家康に仕え、大坂の陣にも出陣して、なんと九六歳の長寿を全うしました。政勝は真田十勇士の一人「三好伊三入道」のモデルともされています。真田家と三好家には婚姻や養子をとおしたつながりがあり、政勝の兄・政康がモデルとされる「三好清海入道」とともに真田十勇士の中にいるのは、こうした歴史的事実を背景にしています。

三好一族ゆかりの勝軍山善長寺

堺最古級の石橋「極楽橋」

善長寺の門前から東、土居川公園の南方に「極楽橋」があります。宿屋町東と神明町東との境界付近の土居川に架けられていた石橋で、昭和四〇年代に阪神高速道路工事で川が埋め立てられ、移設されました。銘文から嘉永六年（一八五三）に造られたことがわかっており、堺でも最古級の石橋です。極楽という橋名はここを通って堺のまちから王子ケ飢墓地へと向かう葬儀参列者の列が続いたことが由来といいます。川を越えると、此岸から彼岸へと至る。そういう昔の死生観が感じられる橋名です。

公園の片隅に保存されている極楽橋



■参考資料
『和泉名所図会』秋里籬島・竹原信繁、『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告書』大阪府、『白桜 与謝野晶子と堺・覚応寺』白桜忌二十年史編纂委員会、『大阪の寺近代こぼれ話』荒木伝、『堺の四季第28～40号』堺文化観光協会編、『堺人第4号』堺泉州出版会、『歩いて学んだ「堺県」』堺なんや衆、『明治十年代の堺県再置運動』北崎豊二著、『戦国期三好政権の研究』天野忠幸著、『戦国三好一族』今谷明、『論集戦国大名と国衆10阿波三好氏』岩田書院、『大阪の史跡を訪ねて 中世編』大阪民主新報、『内川・土居川お散歩マップ』内川・土居川まつり実行委員会、『堺春秋』中山凡流編、『歴史をとどめる橋の名前 伝えたい内川・土居川の今昔』内川・土居川まつり実行委員会

まち歩き阪堺線シリーズ⑤　妙国寺前〜花田口

堺きっての貿易商と子育て幽霊伝説の寺

全国的に有名な妙国寺以外にも、貿易商人西ルイスの菩提寺、夏目漱石が訪れた学校、子育て幽霊伝説のお寺など、見どころはたくさんです。

本受寺

木屋一族が屋敷を連ねた地

妙国寺前停留場を降りると、目の前に「材木町交差点」があります。かつてこの一帯は「材木町濱」と呼ばれ、材木を商う木屋一族が住んでいました。戦国時代末には武将が木屋の屋敷に宿泊したという記録もあり、繁栄ぶりがうかがえます。当時は城や砦の建築ラッシュで、戦乱で焼失した家屋敷の再建需要も大きく、材木商は有力者にとって大切な存在でした。数十年を経た元禄二年（一六八九）の『堺大絵図』でも、この区域に「木屋」を称する屋敷が多く見られます。

材木町交差点

ルイスと名乗った豪商の菩提所

材木町から東に進むと、妙国寺とその向かいに本受寺があります。

本受寺は江戸幕府成立前後の時代に活躍した貿易家西ルイス（宗真）の菩提寺です。元は武士でしたが、文禄年間（一五九〇年代半ば）フィリピン・ルソン島に移り貿易に従事、慶長一〇年（一六〇五）来日したルソン船に通訳として同行し、徳川家康に謁見しました。その後帰国し、元和年間（一六一五〜二四）堺に居を構え晩年を過ごしています。「ルイス」はキリシタンとしての洗礼名ですが、仏教に転向してお寺にその名を残すこととなりました。

本受寺碑

文豪夏目漱石が講演を行った場所

本受寺山門前の道を南西方向に進むと大阪府立泉陽高等学校の校舎が見えてきます。そのルーツは明治七年（一八七四）開口神社に開設された女紅場（じょこうば）（読み書き算盤、裁縫などを教えた女子教育機関）で、その後堺市立堺高等女学校となって現在地に移転し、明治四四年（一九一一）八月には朝日新聞主催夏目漱石講演会の会場となりました。漱石はマクラの部分で、明治二〇年代に堺に来たことがあり、久しぶりに堺を訪れて見回すと辻々に「夏目漱石君」などと講演案内が貼られ、まるで晒し者になったようであまりありがたくない、と愚痴を交えたユーモアあふれる語り口を見せています。

ちなみに堺高等女学校は与謝野晶子の母校でもあります。

泉陽高等学校

子育て幽霊伝説の名僧ゆかりの寺

大阪府道一二号（堺大和高田線）に出て泉陽高校の正門前を過ぎると、その向かい側に見えてくるのが櫛笥寺（くしげじ）です。同寺で江戸時代以来「壺日審様（つぼにっしんさま）」と呼ばれ信仰を集めている日審上人には、不思議な出生譚があります。慶長四年（一五九九）に堺の絹屋清左衛門の娘・お梅が出産間近で亡くなり、土葬されましたが、その壺棺の中で奇跡的に出生したというのです。死んだはずの産婦が墓の中で生んだ我が子を救うため毎晩幽霊となって飴を買いに来る「子育て幽霊」という怪談がありますが、日審上人と母・梅はモデルと目され、同寺ではその出生譚にちなんで「安産腹帯」を授与しています。

櫛笥寺

■参考資料
『堺市史』堺市役所、『海外貿易史（鎌倉時代〜徳川時代鎖国まで）』御朱印船美術展事務所編、『海外視点・日本の歴史9　朱印船と南への先駆者』ぎょうせい、『朱印船時代の日本人　消えた東南アジア日本町の謎』小倉貞男、『影印本異国日記―金地院崇伝外交文書集成』異国日記刊行会編、『御朱印船航海図』中村拓、『南海の貿易商・西類子』中田易直（『歴史読本』1978年1月号）、『西ルイス覚書』山本皓造、『戦国期三好政権の研究』天野忠幸、『戦国三好一族』今谷明、『泉陽高校百年』大阪府立泉陽高等学校記念誌編集委員会編、『大阪伝承地誌集成』三善貞司

まち歩き阪堺線シリーズ⑥
花田口～大小路
「聖女伝説」から「奇縁冰人石」へ

北区の町名に残る「花田」村に至る街道の入り口だった花田口から、東西のメインストリート大小路まで、往年のキリシタンや名奉行など、街の歴史の名残を訪ね歩きました。

戎公園（ザビエル公園）

ザビエル公園と堺の聖女

花田口停留場の西側にある戎公園は「ザビエル公園」とも呼ばれます。天文一九年（一五五〇）来堺したフランシスコ・ザビエルを歓待した豪商・日比屋了珪（りょうけい）（了慶）の屋敷があったことがその由来。当初はザビエルたちを怪しんでいたとも言われる了珪でしたが、宣教師と交流するうちに信仰に目覚め、屋敷内に瓦葺き三階建ての教会を建設しました。

三人の娘たちもキリシタンとなり、中でも長女モニカ（一五四九～七七）は「堺の聖女」と呼ばれた熱心な信徒でした。許婚だった叔父が仏教徒だったため結婚を拒み、刀を突きつけられてもなお翻意せず、ついには叔父をキリシタンに改宗させめでたく結婚した、などの逸話がのこっています。

公園内の「聖フランシスコ・ザビエル芳躅（ほうたく・良い事跡の意）の碑」

奉行所跡と名奉行の逸話

公園を出て大阪府道・奈良県道一二号（堺大和高田線）を東に向かうと、堺市立殿馬場（とのばば）中学校の角近くに「堺奉行所跡碑」と説明板があります。戦国期には石田三成も着任した堺政所があった場所で、江戸時代には堺奉行がここを本拠として堺の町や河内・和泉の天領を統治していました。

天保時代の初期に在任した矢部定謙（やべさだのり）は、権勢に媚びない剛直な姿勢を貫いた名奉行として知られ、堺在任中には、眼科医と先代の隠し子が争った裁判で、古歌も交え道理をもって双方を諭し和解に導いた逸話がのこされています。

堺奉行所跡・旧堺市役所跡碑

おなじみ堺音頭作詞家の生家跡

堺奉行所跡から府道をひとつ西に戻って南下すると他の碑と並んで「山本梅史（ばいし）生家の跡碑」があります。梅史は本名を徳太郎といい、明治から昭和初期にかけて活躍した俳人です。七歳の時父と死別しますが、神童と呼ばれるほどの才能を発揮し、高浜虚子らに師事。俳人としての活躍のほか、堺市役所に勤め市政にも携わりましたが、何よりも有名なのは『堺音頭』の作詞者としてでしょう。「物のはじまりやなんでも堺三味も小唄もみな堺」は堺市民にはおなじみの名フレーズです。

山本梅史生家の跡碑（左）

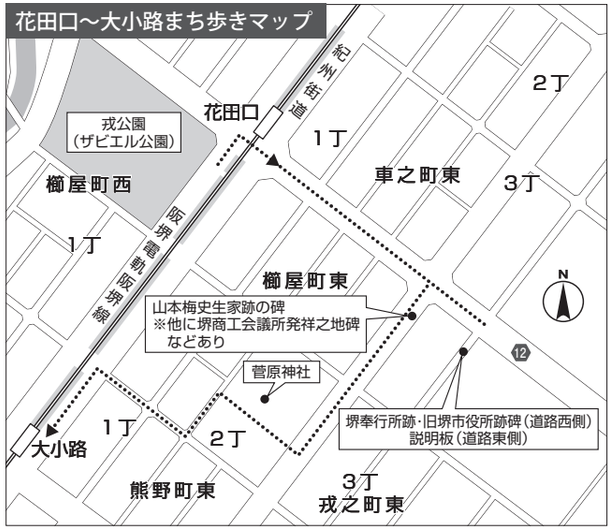
町衆に慕われた石田梅岩の座像

さらに南に進むと菅原神社が見えます。菅原道真公自作の木像が堺の浜に漂着したのを祀ったのが始まりと伝えられ、戎社（えびす）・薬祖社も併せ祀られる境内には、思想家・石田梅岩（ばいがん）（一六八五～一七四四）の座像があります。梅岩の創始した石門心学（せきもんしんがく）は江戸時代後期、商の倫理を説いた思想で、身分を超え多くの人に信奉されました。

府の有形文化財に指定されている随身門のかたわらには「奇縁冰人石（きえんひょうじんせき）」もあります。迷子を探す親が子の名を書いた紙、見つけた人が子の特徴を書いた紙を貼り合ったもので、かつて堺の町の中枢だったこの一帯がおおいに賑わっていたことを示しています。

菅原神社の石田梅岩座像

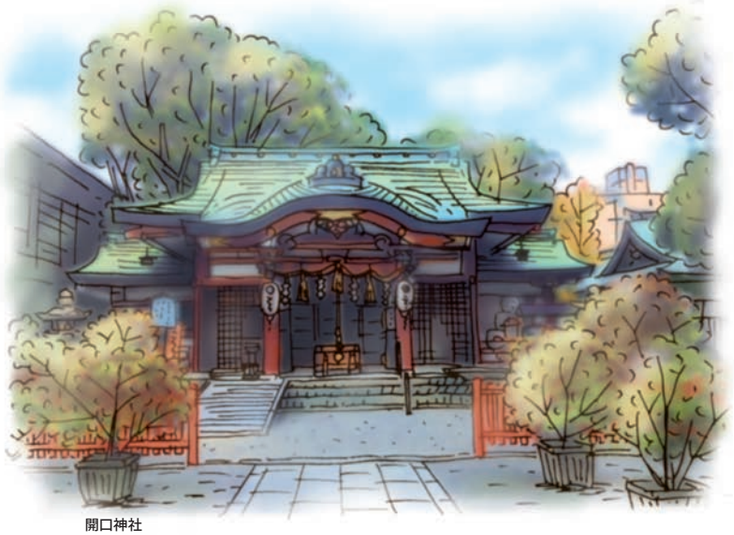
「奇縁冰人石」は境内西側随身門のかたわらに



■参考資料
『堺市史』堺市、『サビエルの渡来と西洋文化』大阪市教育委員会、『ザヴィエルと堺』湯谷稔、『日比屋了珪一族』松田毅一、『堺の聖女』岡田章雄、『江戸時代の堺のまちと堺奉行 堺市立中央図書館郷土資料展』堺市立中央図書館編、『堺奉行の新資料 いま描かれる豊かな都市像』堺市博物館編、『天保暴れ奉行 気骨の幕臣矢部定謙』中村彰彦、『泉 第11巻第9号 山本梅史先生追悼號』山本史太郎、『俳句研究 第5巻第9號 昭和13年9月號 山本梅史追悼』改造社編、『石門心学史の研究』石川謙、『校訂道二翁道話』中沢道二、『日本思想大系42 石門心学』岩波書店編、『堺名所案内』中井恒次郎編、『道ばたの文化遺産 第3号』同研究会編、『大阪伝承地誌集成』三善貞司編

まち歩き阪堺線シリーズ⑦
大小路～宿院
「晴明伝説の辻」から「白夜の兎」群像へ

大小路は堺の旧市街地を東西に横切るメインストリート。明治四年まではこの道が摂津国・和泉国の境界で、まさに「堺（さかい）＝境」の道。その大小路から宿院まで歩きました。


開口神社

安倍晴明ゆかりの「晴明辻」

大小路と南北に走る大道筋の交差点は「晴明辻」と称され、陰陽師安倍晴明ゆかりの辻として知られていました。占いの一種に、辻に立って最初に通る人の言葉から吉凶を判断する「辻占」がありますが、江戸時代の随筆『本朝世事談綺』には「晴明がここを通りかかった際に後世のために占いの書を埋めた」とし、辻占の起源だという記述があります。同じく江戸時代の『全堺詳志』はこの説を根拠なしとしていますが、気になるのはなぜこんな伝説が生まれたのかです。晴明は、阿倍野に住む安倍保名と信太山に住む白狐葛之葉の子とする説話があります。両地を結ぶ位置にある堺の住民にとってもおなじみの物語で、「晴明辻」伝説の元になったのかもしれません。

交差点北東に建つ晴明辻跡碑

三つ茄子の神紋「開口神社」

晴明辻から大小路通りを東に向かい、山之口商店街のアーケードに入って南に進むと、開口神社の鳥居の前に出ます。同神社は堺旧市内唯一の式内社（平安時代の「延喜式」に記された神社）です。その神紋は遠くからは「巴紋」に見えますが、よく見ると「三つ茄子」。社伝によると白鳳年間（七世紀中旬）頃氏子に一つの蔓より茄子が三つなるという奇瑞が起こり、それが神社に奉納されたのが由緒とされます。

開口神社本殿と「三つ茄子」

開口神社でこれも見ておきたいのが「三好元長戦死跡」の碑。商店街側の鳥居から入って、向かって左側の狛犬の手前にあります。元長（一五〇一～三二）は三好三人衆の父で、細川晴元に仕えた武将です。堺公方足利義維を擁して畿内の実力者となりますが、晴元と仲違いし、また法華宗を保護したことで一向宗と対立。晴元と結んだ一向一揆衆の猛攻で、開口神社付近の顕本寺に立て籠りましたが、あえなく戦死しました。義維と元長の政権を「堺幕府」と呼ぶ史家もいます。

三好元長戦死跡碑

「宿院頓宮」と「白夜の兎」群像

商店街を南下、山之口筋の交差点を渡り東に進むと宿院頓宮の鳥居が。同社は住吉大社・大鳥大社の夏の祭礼で神輿を迎える「御旅所」で、境内東側には、海幸山幸神話に登場する潮干珠が埋められ雨が降っても空堀のままという「飯匙堀」があります。

水が溜まることのない「飯匙堀」

また公園スペースには、岩田千虎（一八九三～一九六六）指導の下に制作された「白夜の兎」群像があります。千虎は獣医のかたわら動物の彫刻を作り続けたという異色の彫刻家。昭和八年（一九三三）以降二科展や帝展に相次いで入選、戦後は日展の審査員なども務め、昭和の堺を代表する芸術家の一人です。

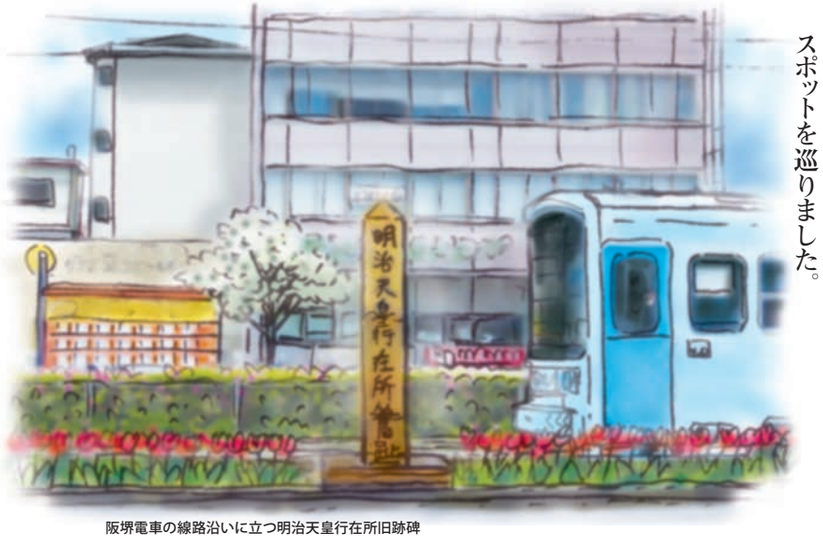
岩田千虎が手がけた「白夜の兎」群像

千虎は昭和三三年第一次南極観測隊帰還の際取り残された樺太犬一五頭の慰霊像（のちにタロ・ジロ二頭の生存が判明）も制作しており、像（オリジナル老朽化のため昭和六二年復元したもの）は今も大浜公園内にあります。

■参考資料
『堺市史』堺市、『本朝世事談綺』菊岡沾涼、『頭註全堺詳志』河野文吉・高志芝巌・高志養浩、『俚言集覧増補上巻』名著刊行会、『堺名所案内』中井恒次郎編、『大阪伝承地誌集成』三善貞司編著、『彫刻の美』本郷新・中央公論美術出版、『そてつのあゆみ』蘇鐵會編

まち歩き阪堺線シリーズ⑧
宿院～寺地町
「千利休屋敷跡」から「河盛仁平邸宅跡」へ

「さかい利晶の杜」オープンで活気づく宿院界隈から、中之町を経て寺地町まで、面白いエピソードに彩られたスポットを巡りました。



阪堺電車の線路沿いに立つ明治天皇行在所旧跡碑

さかい利晶の杜も近い「千利休屋敷跡」

宿院停留場を下車すると、今年三月オープンした「さかい利晶の杜」はすぐそこ。その東隣の通りに「千利休屋敷跡」があります。「椿の井戸」とゆかりの大徳寺山門の古い部材で建てられた「井戸屋形」など、利休の劇的な生涯をしのぶことができるスポットです。

千利休屋敷跡

千利休屋敷跡外観

さかい利晶の杜

キリシタンを匿った「唱名山阿免寺」

屋敷跡から南に向かい、角を右に曲がった先の大きな通りには、阿免寺があります。開創は『堺市史』によれば文禄元年（一五九二）。キリシタン弾圧が強まった時代、同寺を開いた光阿浄林上人は、浄土宗の「他力本願」の教えに基づく万人救済の精神で、キリシタンを温かく迎え入れました。当時の本堂は床が高く、下にマリア像を置ける構造だったといいます。現在の建物は戦後の再建ですが、キリシタンの想いを尊重して、本尊・阿弥陀如来像の光背部分に十字架が取り付けられています。日本宗教史上ユニークなお寺です。

阿免寺

英彰小学校

詩人と作曲家の母校「英彰小学校」

中之町西から寺地町西との境目の市道を北西に行くと、堺市立英彰小学校があります。明治三四年（一九〇一）堺市立英彰尋常小学校として創立され、昭和一二年（一九三七）現在地に移転。卒業生に詩人の安西冬衛（一八九八～一九六五）と作曲家の飯田信夫（一九〇三～九一）がいます。

安西冬衛は「てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った」の一行詩「春」が有名。飯田信夫は戦前の国民歌謡「隣組」の作曲者……といってもピンと来ない人が多いでしょうが、戦後生まれの昭和世代ならザ・ドリフターズの人気番組「ドリフ大爆笑」のオープニングテーマの元歌、でおわかりいただけるでしょう。同校の校歌はこの二人の作詞・作曲で、モダニズム詩人と国民的歌謡の作曲家との組み合わせには興味深いものがあります。

明治天皇も訪れた「河盛仁平邸宅跡」

英彰小学校から引き返して、まっすぐ南東に向かい紀州街道に出ると、阪堺線の線路脇に明治天皇行在所旧跡碑があります。明治一〇年（一八七七）天皇が滞在されたこの場所には、幕末から明治にかけて活躍した豪商・河盛仁平の邸宅がありました。

河盛仁平は天保四年（一八三三）生まれ。家業の綿布問屋・廻船問屋を継いで商勢を拡大。日本で初めて広告入り貸し傘を考案したアイデアマンであり、社会貢献にも熱心でした。自身は質素倹約を旨とし、晩年家業が不振に陥った時も「自分は裸で出て来て裸で帰るのだ」と語り、五三歳で没したといいます。

アサヒビール創業者・鳥井駒吉は若き日仁平の支援を受けており、仕事への情熱や社会還元の考え方で影響を受けたといわれています。その意味で、仁平の精神は駒吉を通じて今なお生きているといえます。

■参考資料
『堺市史』堺市、『頭註全堺詳志』河野文吉・高志芝巌・高志養浩、『堺名所案内』中井恒次郎編、『Asahi 100』アサヒビール㈱、『アサヒビールの120年』同前

まち歩き阪堺線シリーズ⑨
寺地町～御陵前
「晶子の母校」から「乳守明神社」へ

かつて広大な寺の一部だった寺地町。一帯は太平洋戦争時の大空襲でも比較的被害が少なかったこのエリアで、今回は著名なお寺とともに、比較的知られていないスポットも巡り歩いてきました。

納屋助左衛門の屋敷を移したとも言われる大安寺の本堂

与謝野晶子ゆかりの小学校

阪堺電車・寺地町停留場と交差する東西の通りを東に進み、少林寺町東の交差点を過ぎると、堺市立少林寺小学校が見えてきます。前身は与謝野晶子とその弟の母校・宿院尋常小学校であり、正門横には「をとうとは をかし おどけし 紅き頬に 涙流して 笛ならうさま」の歌碑があります。

堺市立少林寺小学校正門横の晶子歌碑

豊臣秀吉が愛した塩風呂

少林寺小学校の北側にあるのが旭蓮社大阿弥陀経寺です。創建者・澄円は和泉国大鳥郡の出身で、鎌倉時代末期、元(中国)に渡り、念仏修行の結社である白蓮社に学び、帰国後の元徳二年(一三三〇)白蓮社に倣って旭蓮社を草創しました。

大阿弥陀経寺

同寺にはかつて塩風呂が設けられており、豊臣秀吉が入ったという記録があります。

化物の正体見たり松木淡々?

大阿弥陀経寺から西に戻り、少林寺小学校の北西角を曲がって南に進み、丁字路を東に曲がると大安寺に着きます。総檜書院造の本堂は富裕層の住宅の特徴を示しており、豪商・納屋(呂宋)助左衛門の邸宅だったという伝承があります。狩野派の本堂障壁画や名品「虹の手水鉢」など、貴重な文化財を残す同寺には、「松木淡々頭巾塚」と呼ばれる石碑があります(境内は堺文化財特別公開期間のみ見学可)。

松木淡々頭巾塚

松木淡々(一六七四～一七六一)は江戸時代中期の大坂生まれの俳人。芭蕉一門に学び、大坂を拠点として俳諧の秘伝書・伝授書を乱発して一介の俳人とは思えないほどの財を成しました。俳文集『鶉衣』で知られる俳人横井也有が訪問した際、横柄な態度で一言も話さない。その不遜を目の当たりにした也有が去り際に作ったのが「化物の 正体見たり 枯尾花」の一句でした。この句は広く伝わって、現在も「幽霊の…」という形で使われます。

古き時代のよすがを残す界隈

大安寺を出て西に向かえば南宗寺。戦国武将・三好長慶が一六世紀半ばに建立、町衆文化の拠点の一つとなった堺で最も有名なお寺の一つで、境内は一般に開放されています(拝観料・大人四〇〇円・中人三〇〇円・小人二〇〇円)。

南宗寺

さて南旅籠町界隈には、かつて「乳守」という地名がありました。その由来は古く、神功皇后が開いた御田で田植えする(住吉大社御田植神事の起源)ため長門国から来た植女たちがこの地に住み着いたのが始まりと伝わります。

臨江寺境内の乳守明神社

現在はほとんど痕跡を残していませんが、南宗寺の西側にある臨江寺の境内には「乳守明神社」の社があり、「乳守」の名を今に伝える数少ないよすがの一つとなっています。

■参考文献
『堺市史』堺市、『頭註全堺詳志』河野文吉・高志芝巌・高志養浩、『堺名所案内』中井恒次郎編、『大阪伝承地誌集成』三善貞司編著、『近世上方歌舞伎と堺』佛教大学研究叢書、『上方色町通』食満南北、『奇説つれづれ草紙』京都大学国語国文資料叢書

まち歩き阪堺線シリーズ⑩
御陵前～東湊
「出島浜」から「風車の里」へ

旧堺町域から旧湊村の領域へ。紀州街道が阪堺線と分かれるこのエリアでは、「漁港」や「鯨」「壷塩」「風車」など、農漁村としての歴史がたどれます。

出島漁港

2011年復活した鯨山車。出島浜での曳行の一こま（写真提供：橋波信二氏〈堺出島浜鯨祭り復活の会〉）

「鯨」の記憶を今に伝える出島浜

阪堺電車・御陵前停留場を南に下り、土居川を越えて西に曲がると出島橋（出島橋交差点）が見えてきます。さらに西方向に約七〇〇m行く（マップ参照）と出島漁港です。

出島浜の歴史は非常に古く、鎌倉時代には大阪湾沖合に迷い込んだ鯨の捕獲に失敗して慰め合ったこともあったとか。地元には「鯨まつり」が伝えられています。「くじらとろとて網まですいて」などと鯨音頭を歌いながら、竹組みで作った鯨山車（だし）を担いで出島浜から住吉大社まで練り歩くというものでした。昭和二九年（一九五四）以降半世紀以上途絶えていましたが、平成二三年（二〇一一）、地元住民中心の取り組みにより約一三mの鯨山車が復活。住吉大社ご鎮座一八〇〇年大祭で奉納されました。

全国を制覇した「天下一」の壷塩

阪堺線と分かれ、紀州街道を南に進むと、東側に見えてくるのが船待神社の鳥居です。かつてはもっと東の塩穴郷（しおあな）にあって塩穴天神社と呼ばれていました。延喜元年（九〇一）菅原道真（すがわらのみちざね）が左遷先の太宰府へ下る船を待つ間に参拝したと伝わり、一一世紀には道真を合祀して船待天神社と改称。のち現在地に遷りました。

面白いのが「塩穴」という地名にも見られる塩との関わりです。かつて湊地区は塩を壷に入れ焼き上げた「壷塩」の名産地で、江戸時代には「天下一 御壷塩師・堺湊伊織」などの名で全国に名を轟かせていました。

大昔からあった紀州への道

紀州街道は、海岸線が現在より東にあった古代には、白砂青松の美しい海岸沿いで「岸の辺の道」と呼ばれ、江戸時代には紀州藩の参勤交代の道筋でした。

船待神社の先は、御陵前までとはうって変わって、住宅街を通る静かな道。現代風の住宅に交じって、ところどころに格子窓の伝統的町屋家屋が見られ、旧街道の面影をひときわ色濃く残します。なかでも目を引くのが「旧湊郵便局」の建物。昭和八年（一九三三）から用いられている木造の建物で、レトロ感にあふれています。

今も残るレトロな「旧湊郵便局」（手前）

湊西ぼうさい公園では地域の歴史をパネル展示

『街道をゆく』の司馬遼太郎も訪れた道中には湊西ぼうさい公園があって、湊エリアの歴史を説明したパネルが掲げられています。

「風車の里」だった泉州地方

堺市立新湊小学校の前では「風車」に出会えます。

江戸時代の泉州地域は綿業で栄えましたが、明治に入ると輸入綿によって大打撃を受けました。産業転換を図り、湊から石津にかけてミツバ、ホウレンソウなどの栽培を始めましたが、砂質土壌だったため、大量の水が必要でした。

そこで、大正の頃、地元の有志がオランダ風車をヒントにして浜風を動力とした風車による地下水の汲上げを考案。急速に普及し、昭和四〇年（一九六五）頃の湊・石津地域には二〇〇基近くが林立していたといいます。しかし、それ以降は農地の縮小やスプリンクラー導入などによって用いられなくなり、現在では消滅してしまいました。新湊小学校前にある風車はレプリカで、湊の農業文化遺産を今に伝えています。

堺市立新湊小学校前の風車

■参考資料
『堺市史』堺市、『堺名所案内』中井恒次郎編、『街道をゆく 堺・紀州街道』司馬遼太郎、『堺湊焼塩壷』前田長三郎他、『堺・湊の風景100』湊駅前東通り商店会、『紀州街道をゆく堺西湊町歴史絵図』鎌苅一身制作※以上二点は一心堂書店（湊駅下車すぐ）で取扱、『堺、出島漁港のいまむかし、海水銭湯、大魚夜市、布団太鼓』都市デザイン学生の会、『堺出島浜鯨祭り』鯨祭りをはじめとする湊・出島観光地域活性化実行委員会

まち歩き阪堺線シリーズ⑪
東湊〜石津北

「阪田三吉」「小栗判官」伝説的人物の足跡をたどって

東湊から一昨年開業した石津北まで、なにわの天才棋士・阪田三吉のふるさと、伝説のヒーロー・小栗判官がたどった街道などを巡ってみましょう。

熊野（小栗）街道と第2阪和国道の交点にたたずむ一里山地蔵尊（左）

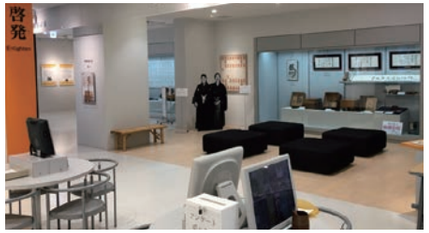
「王将」が生まれ育った地

現在の堺区協和町の辺りは明治初め「大鳥郡舳松村字塩穴」といいました。この地に明治三年（一八七〇）に誕生したのが、阪田三吉（〜昭和二一年〈一九四六〉）です。

読み書きも苦手の身ながら、将棋に無類の才を発揮。ライバル関根金次郎はじめ強豪たちとわたり合った波乱の生涯は、没後発表された北條秀司の戯曲『王将』で広く知られるようになりました。ただここに描かれる三吉像は、無学や奇行の一面が誇張される傾向が見られます。

三吉の生地である現・協和町には「王将 阪田三吉顕彰碑」があります。すぐ近くの市立人権ふれあいセンター内の舳松人権歴史館には「阪田三吉記念室」が設けられ、同地域のあゆみとともに、大胆さとともに思慮や礼儀をそなえた人でもあった三吉の実像を伝えています。

「王将 阪田三吉顕彰碑」。碑名は大山康晴十五世名人の筆による



舳松人権歴史館の阪田三吉記念室

冥土から蘇った男が通った道

続いて歩く熊野街道は「小栗街道」とも呼ばれます。名の由来は、説教節や浄瑠璃などで語られた伝説上の人物「小栗判官」です。

豪勇の士・小栗判官は、美貌の照手姫を見初め結婚を申し込みますが、悪党である照手の親兄弟に毒殺されてしまいます。

閻魔大王の計らいで蘇るものの、動けない餓鬼の姿。相手が小栗とは知らず手を差し伸べた照手はじめ、善意の人々が引く車で熊野にたどりつき、熊野の湯で元通りの姿となって悪を討ち照手とも結ばれる、という不思議なお話です。

堺市内の地名「熊野」を「ゆや（＝湯屋）」と読ませるのは、この小栗判官の伝説にちなんだという説もあります。

平安の昔から都と熊野を結び、多くの旅人が通ってきた街道沿い。住宅や工場が連なる静かな街並みのなかには、旅人を導く一里塚に祀られたお地蔵様や祭りの伝統を支える布団太鼓の蔵などもあって、地域の歴史を偲ばせます。

■参考文献
『堺市史』堺市、『堺名所案内』中井恒次郎編、『郷土史にかがやく人びと5』青少年育成大阪府民会議、『九四歩の謎 孤高の棋士・坂田三吉伝』岡本嗣郎、『漂泊の物語 説経 小栗判官』広末保、『和泉のむかしばなし』和む研究室、『堺・布団太鼓盛衰記』山中啓祐己 他

太鼓蔵すぐ南の道沿いに建つ熊野街道碑

街道沿いには東湊地区の太鼓蔵も

東湊停留場界隈

まち歩き阪堺線シリーズ⑫
石津北～石津
「乳岡古墳」から「えべっさんの街」へ

古墳建造のための「石」、海の彼方から来たエビス神が手に握っていた「五色の石」など、地名の由来に諸説ある石津のまちの北部を歩きました。

乳岡古墳

住宅街に接する小さな丘

「石津」の名の由来には「古墳を築く石を受け入れる津（船着き場）だったから」「エビス神が五色の石を持ってきたから」等諸説がありますが、いずれも長い歴史を示す内容。それを示す名所も現存しています。

石津北の停留場から府道三四号を東に向かった先にあるのが、百舌鳥古墳群の最西端に位置する乳岡（ちのおか）古墳。四世紀後半の築造と推定され、前方後円墳としては百舌鳥古墳群でも最古といいます。被葬者は不明ですが、相撲と埴輪の祖・野（の）見宿禰（みのすくね）や仁徳天皇の乳母などの伝説があります。

府道34号からも見える乳岡古墳の墳丘

昭和五〇年代まで寺が建っていたという墳丘は、元来の前方後円（台形＋円形）のうち前方部が部分的に失われた形です。周りを囲む濠もなくなり、府道沿いの店舗と住宅街に囲まれた小さな丘という風情。保存のため立ち入りは禁止されており、周辺住宅街の路上から眺めることになりますが、古墳と現代の暮らしが共存する街・堺ならではの景観といえます。

えべっさん ゆかりの二神社

乳岡古墳の石碑があるあたりから西南方向に府道二〇六号を進み、国道二六号に出て北に行くと石津（いしづ）神社、さらにそこから西方向

国道26号沿い、境内に緑の木々が茂る石津神社

に約九〇〇m（マップ参照）歩くと石津太神社にたどり着きます。

石津太神社は江戸時代以来の鳥居を今にのこす

両神社はともに、はるか昔五色の石を携えこの地に漂着したというエビス神（えべっさん）を祀り、「日本最古の戎（えびす）宮」を称しています。源流は一つの神社だったのでしょう。

石津神社の境内には、樹齢数百年の御神木や与謝野晶子の歌碑（「人とわれおなじ十九のおもかげをうつせし水よ石津川の流れ」など石津川をうたった二首）があります。

石津太神社の北本殿・南本殿・拝殿・一の鳥居・二の鳥居はいずれも江戸時代の建築で堺市の指定有形文化財。毎年一二月に行われる「やっさいほっさい」祭も有名です。

ひとやすみの地蔵さん

さて、石津太神社から石津停留場まではすぐなのですが、ここまで来たらぜひともおまいりしたいのが「横寝地蔵」。紀州街道を少し北上して石津川駅前東本通商店街に入ると、すぐ南側に地蔵堂があります。

石津太神社鳥居前の、エビス神の五色の石を埋めたとされる場所

店舗と住宅にはさまれた横寝地蔵のほこら

元々は石津川沿いに祀られていたのですが、いつのまにか横倒しに祀られて「横寝地蔵」になった、と言われる不思議なお地蔵さん。眼病や水難除けにご利益があると言われ、忙しい現代「慌てずゆっくり、ひとやすみしていきなさい」とさとしているような親しみやすい仏様です。

■参考文献
『堺市史』堺市、『堺名所案内』中井恒次郎、『和泉名所図会』秋里籬島撰、『堺研究』堺市立図書館編、『和泉のむかしばなし』和む研究室編、『堺市外二郡郷土誌帖』地理歴史研究会編、『摂河泉名勝』池辺義象 他

まち歩き阪堺線シリーズ⑬
石津～船尾
「太陽橋」から「諏訪森」へ

はるか昔、神功皇后の船団の最後尾の船が海岸に着いたのが、地名の由来と伝わる「船尾」。街なかに息づく歴史の遺産を、めぐり歩きました。

太陽橋からの石津川の眺め

南朝名将の記憶を伝える碑

石津停留場を降りて、紀州街道を南に向かうと石津川。橋は「太陽橋」と呼ばれています。昔、人びとが、石津川で、朝は生駒より昇ってくる朝日、夕は堺浦に沈む夕日を拝んだというのが橋の名の由来だとか。

橋を渡った先すぐ左手には「北畠顕家戦死の地」の供養塔と碑があります。北畠顕家（一三一八～三八）は『神皇正統記』を著した北畠親房の長男。後醍醐天皇のもと建武の新政権で活躍しますが、南北朝の争いのなか堺浦・石津で二一歳の若さで討ち死にしました。

北畠顕家の供養塔と碑。かたわらには解説板も

現在、供養塔と碑は石津ゆかりの歴史的人物の大切な史跡として地域の人びとによって守られ、碑の横のポストには解説のパンフレットが入っています。

地元出身名僧ゆかりのお堂

顕家碑の北側に接する道を南方向に進み、阪堺電車の踏切を越えて約五〇〇m行くと、右手に諏訪神社遥拝所、その東向かいに浜寺船尾薬師堂があります。

諏訪神社は旧船尾村の氏神。明治末年、政府の「神社合祀令」によりご神体が石津太神社に合祀された後、現在の地に遥拝所が建てられました。

石津太神社に合祀されている旧・諏訪神社のご神体を拝むための遥拝所

船尾出身の名僧ゆかりの浜寺船尾薬師堂

浜寺船尾薬師堂は、鎌倉時代の高野山の名僧・道範（一一七八～一二五二）ゆかりのお堂。もとは、この地出身の道範が創建した寺がありましたが、明治時代はじめに廃寺となり、その後、地元の人びとによって小堂、さらに現在の薬師堂が建立されました。

教会の隣に小さな神社が

道を西に進めば、ゴールである船尾停留場ですが、少し寄り道して踏切前の道を右折してみましょう。日本聖公会の堺聖テモテ教会が見えてきます。

明治二二年（一八八九）に宣教師が堺で伝道を開始したのが同教会のはじまり。戦後、諏訪森地域に移転し、昭和六〇年現・教会堂を建設。シンプルな白亜の建物は昭和六二年大阪まちなみ賞、平成六年堺市都市景観賞を受賞しています。

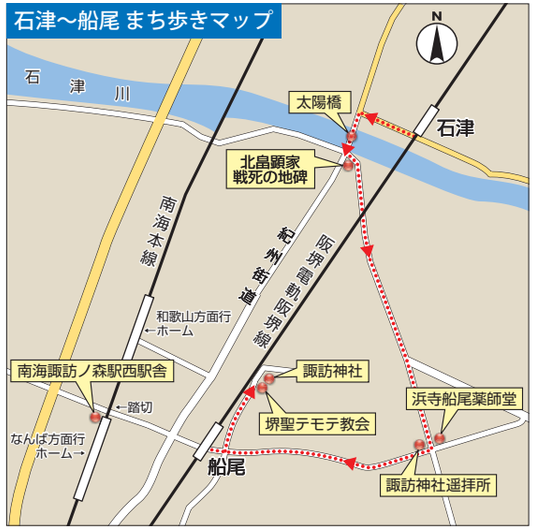
歴史ある住宅街の一角に建つ堺聖テモテ教会

さて、教会の北隣、小さな植え込みの奥の細長い敷地には、鳥居とほこらがあります。一帯は諏訪神社の元々の鎮座地で、昭和二四年（一九四九）末社があった土地の一部を買い上げ、あらためてご祭神を祀ったことが、説明板に記されています。

教会すぐ隣の一角には鳥居とほこらが

さらに足を伸ばせば、南海諏訪ノ森駅。大正八年（一九一九）築の西駅舎は地域の名所でもあります。

静かな住宅地のなかにも、住まう人びとが積み重ねてきた地域の歴史への思いが浮かび上がります。



1919年築、今も現役の諏訪ノ森駅西駅舎

■参考文献
『堺市史』堺市、『堺名所案内』中井恒次郎編、『和泉名所図会』秋里籬島撰、『堺研究』堺市立図書館編、『和泉のむかしばなし』和む研究室編、『堺市外二郡郷土誌帖』地理歴史研究会編、『摂河泉名勝』池辺義象著、『大阪府全志巻之五』井上正雄編、『式内社調査報告』式内社研究会編、『真言密教成立過程の研究』櫛田良洪著

まち歩き阪堺線シリーズ⑭
船尾～浜寺駅前
「諏訪ノ森駅西駅舎」から「浜寺公園駅旧駅舎」へ

二〇二一年「大和川」から始まった阪堺線まち歩きも、いよいよラストスパート。阪堺線、南海線そして紀州街道が並行しまた交差する、浜寺への道のりを歩きます。

南海線の上を横切る阪堺電車の鉄橋

町なかに残る「三光」の名

船尾停留場を下りたら、まずは前回も紹介した南海諏訪ノ森駅西駅舎に入り、入り口すぐ上のステンドグラスを眺めましょう。描かれているのは白砂青松の風景。これから向かう浜寺（高師浜）の地は古来浜辺に松林が広がる美景で知られていました。

諏訪ノ森駅西駅舎のステンドグラス

駅舎を出た後は、住宅や店舗が連なる紀州街道を南へ。紀州街道碑が建つ浜寺三光会館前を過ぎ、細い三光川にかかった三光橋と呼ばれる小さな橋を渡ります。「三光」の名は、南北朝時代高師浜に大雄寺というお寺を建立した禅宗の名僧・三光国師（孤峰覚明、一二七一～一三六一）に由来するもの。南方の浜よりには「三光松」と呼ばれた見事な松の記憶を伝える碑もあります。

三光橋

浜寺三光会館と紀州街道碑

三光松跡碑

地名「浜寺」はもともと、大雄寺の通称だった「浜の寺」から来た、と言われています。

阪堺と南海の交点

さらに歩いて、右折して南海線の踏切を越えると、大阪府道二〇四号堺阪南線。ここから南は、車が行き交うこの広い府道が「紀州街道」になります。

歩道を南に行くと、東側の家並みの向こうに小さな赤い鉄橋が見つかります。地上を走る南海線と交差する阪堺線の鉄橋で、少し行った先にある踏切をわたって北方向に進むと路上から全体を見渡すことができます。

鉄橋の西側にはコンクリートで固められた土台のような部分があり、ここには一九四四年（昭和一九）まで「海道畑（かいどうはた）」という阪堺電車の停留場が設けられていたといいます。

連続立体交差事業により、近い将来、阪堺が鉄橋上を渡る現在の眺めに代わる新しい風景が生まれることでしょう。

明治以来の二大スポット

西側に浜寺公園の松林を眺めながら紀州街道を南に行くと、いよいよ阪堺電車の浜寺駅前停留場です。

停留場の西側には開園から一四五年の歴史を有する大阪府営浜寺公園の正面入口、東側には南海電鉄浜寺公園駅と、明治時代末に生まれた旧駅舎。景勝の地、行楽エリア、また住宅街と、地域の歴史が凝縮された地点といえます。

いずれも本紙おなじみのスポット。その歴史や魅力はここでは書きつくせないので、今後も各コーナーで紹介していきます。

紀州街道（府道204号）と浜寺公園

阪堺電車の浜寺駅前停留場

■参考文献
『堺市史』堺市、『堺名所案内』中井恒次郎編、『日本鉄道旅行地図帳10号 大阪 全線・全駅・全廃線』今尾恵介監修、『昭和の終着駅 関西篇』交通新聞社、『あなたの知らない大阪「駅」の謎』米屋こうじ著、『浜寺公園ぐるり歴史漫歩』浜寺公園管理事務所編

堺製油所のあゆみ

堺・高石・泉大津三市域の沿岸エリアで「堺泉北臨海工業地帯」の整備が開始されたのは一九五六年のこと。堺製油所はＪＸＴＧエネルギー㈱の前身であるゼネラル石油㈱が、現在地で一九六三年建設に着手。一年八ヵ月経て一九六五年に完成し、「ゼネラル石油㈱堺製油所」として操業を開始しました。

一九七〇年、「人類の進歩と調和」をテーマに開催された日本万国博覧会が開催され、高度成長日本を象徴するイベントとなりました。そんな時代背景の中、堺製油所は「重油間接脱硫装置」を建設し、稼働をスタートさせました。この装置は重油から硫黄分を取り除く装置です。

一九七四年、かねてより地域社会の理解を重視していた堺製油所は、地域向け月刊紙「フェニックス」の発行を開始しました。一一月号では「フェニックス・テニス教室」の参加者を募集し、第一期が開講されました。当時のゼネラル石油にはテニス愛好の社風があり、それを地域とのコミュニケーションに活かそうとしたのがはじまりで、45年以上経った現在でも続いています。

一九八〇年代は自動車や半導体など、日本製品が世界の市場を席巻した時代で、パソコンあるいはゲーム機という形でコンピュータが日常の暮らしの中に広がり始めたのもこの頃からです。一九八四年に堺製油所に完成した「流動接触分解装置」にも当時最新のコンピューターシステムが導入されました。この装置は重質油を分解させ、ガソリン基材へ転化する装置で、導入によりガソリンの生産能力が大きく向上しました。

昭和から平成に時代が変遷し、平成二年目に入った一九九〇年はバブル景気最後の年です。米ソ冷戦体制が徐々に崩壊し、世界中が大きく揺れた時期でもありました。この年、堺製油所は堺市制一〇〇周年記念事業推進委員会から社会貢献活動に対する感謝状を頂きました。また、フェニックスが同年八月号で創刊二〇〇号を迎え、堺市長から記念のことばが寄せられました。そしてこの年にはポリエステル繊維やペットボトルの原料となるパラキシレンの製造設備を新設し、時代のニーズに対応した生産体制を築きました。

フェニックス・テニス教室の開催風景。昭和50年頃と思われる

重油間接脱硫装置の建設。運び込まれた蒸留塔（上）を敷地に建てる（下）（昭和45年撮影）

常圧蒸留装置の建設
（昭和40年2月22日撮影）

完成当時のパラキシレン製造装置

流動接触分解装置の建設風景
（昭和59年8月23日撮影）

現在（平成26年12月撮影）

ミレニアム・イヤーと呼ばれた二〇〇〇年、この年の七月にゼネラル石油㈱と東燃㈱の合併により東燃ゼネラル石油㈱が発足しました。

二〇〇八年、〝変〟という漢字で表されたこの年は、北京オリンピック・リーマンショック・ｉＰｈｏｎｅの発売など、変化に富んだ年となりました。堺製油所ではこの年、「大容量泡放射システム」を導入し、災害発生時の対応力を大きく高めました。また、一二月には「フェニックス・イヤーエンドコンサート」の第一回を開催し、現在まで毎年の恒例行事として開催しています。

二〇一七年四月、ＪＸグループと東燃ゼネラルグループ（ＴＧ）が経営統合し、ＪＸＴＧグループが発足しました。これにより当所は東燃ゼネラル石油㈱堺工場から、ＪＸＴＧエネルギー㈱堺製油所と名称を改めました。現在に至るまで、半世紀以上の長期に渡り、安全の確保と環境保全に配慮した石油製品・石油化学製品の生産と供給を一貫して行ってきました。地域社会のご理解に支えられてきたこれらの生産活動継続と共に、地域の皆様との交流を変わることなく続けてまいります。

大容量泡放射システムの訓練風景

記念のことば

堺市長　幡谷豪男

当時の幡谷豪男堺市長からの「記念のことば」
（平成2年9月）

地域の皆様との交流

地域の皆様との交流を図るため、月刊地域紙「フェニックス」発行と並行して、毎年恒例の「フェニックステニス教室」「イヤーエンドコンサート」をはじめ、各種のイベントを開催しています。

フェニックステニス教室

イヤーエンドコンサート

フェニックス45周年
浜寺公園駅旧駅舎フェニックス祭

安全への取り組み

南海トラフ地震など大規模地震の対策として、「緊急避難場所兼予備品保管倉庫」「新防災センター」建設、スラリーウォール工法による液状化対策を実施。また各種の防災訓練を行っています。

緊急避難場所兼予備品高所保管倉庫

新防災センター

堺・泉北臨海特別防災地区総合防災訓練

編 集 後 記

阪堺電気鉄道阪堺線の各停留場を目印にしたまち歩き企画として2012年秋スタートした本コーナーも、6年と数カ月を経て“完走”となりました。

年数回の掲載でしたが、毎回読者の皆様からの反響は大きく、ハガキをとおして寄せられた「面白かった」「この場所は知らなかった」「紙面を手に歩いてみた」などのコメントは大きな励みになりました。

制作にあたっては、住吉生まれ・堺育ちで堺エリアの歴史や名所に詳しい陸奥 賢 氏（観光家 / コモンズ・デザイナー / 社会実験者）の協力をいただきました。同氏提供の原案を土台に、本紙編集スタッフが実際に現地をめぐり歩くことにより、毎回の記事は生まれました。

今、刊行を迎えるにあたり、本連載をご愛読いただいた読者の皆様、また記事制作にご協力いただいたすべての方々に、あらためて深く感謝申し上げます。

JXTG エネルギー株式会社
堺製油所 フェニックス編集室

まち歩き阪堺線シリーズ

2019年3月発行

発　行　JXTG エネルギー株式会社
〒592-8550 大阪府堺市西区築港浜寺町1番地

編　集　堺製油所 フェニックス編集室

制　作　株式会社コミニケ

印　刷　有限会社イー・プリンティング